

## 2000年代の戦記から考える慰安所

Comfort station in World War II read from the  
war record of the 2000s written by soldier

篠原真史

### 要 旨

アジア・太平洋戦争が終わり、しばらくすると戦争体験者が手記をまとめるようになる。当初それらは、あまりに悲惨なことあまりに忌まわしいことは書かない傾向であったが、慰安所の記述は少なからず残されている。21世紀を迎えるころ、戦争指導者への不信、残虐な行為への自省という2つのパースペクティブから<sup>1)</sup>、戦記は事実をありのままに伝える文章に変化していく。慰安所についても自身の買春の体験をもとに書き残されていることも多い。このように見ていくと、当時の日本の男性の買春の一般性について理解を深める必要がある。買春のための施設は戦後の社会にもつながり、私たち日本人男性の女性に対する差別的な意識にもつながるものと考えられる。一方女性には、貧困や借金を理由にこの職業を選択することが多いことが明らかにされている。そうした事実への理解が慰安婦問題への合意につながるのではないかと考える。

キーワード：戦記、アジア・太平洋戦争、慰安所、性売買、貧困

### 1. はじめに

アジア・太平洋戦争が終わり、しばらくすると戦争体験者が手記をまとめるようになる。戦記、あるいは戦記ものと呼ばれる文章である。戦争の記憶をまとめたこれらの文章に対して、長らく「作為不作為の嘘が含まれますから歴史家はどうしても一次資料として用いることを躊躇する」<sup>2)</sup>傾向が見られたことを、高橋三郎は『戦記ものを読む』の中で指摘している。

しかし、戦後半世紀以上を経た2000年代を迎えても戦記は刊行されてきた。それらの戦記は、「下士官や兵だった者が事実を『ありの

ままの戦場の現実を伝えることが慰霊であり、追悼であるという意識」<sup>3)</sup>から戦争の現実の姿が記されるようになっていく<sup>4)</sup>。傾向が見られる。川崎春彦<sup>A)</sup>の『日中戦争一兵士の証言 生存率3/1000からの生還』では部隊の公式な記録や戦地の地図などを照合して執筆されている<sup>5)</sup>。

戦争体験者は老境に入り次第に減少する昨今、平和の有難さを是非後世に伝えようと微かな記憶を辿り、地図と資料を見ながら数回追加や修正を重ね、ようやく完成した世に問う生の叫びを次世代を担う若者には是非熟読理解して欲しいと願うものである。

(川崎2001:229)

本稿はこれらの戦記もつ「ありのままの戦場

の現実を伝える」姿勢に着目し、まず戦記から慰安所、そこに働く（拘束されている）慰安婦の姿を読み取っていくものである。

慰安所の記述は、2000年代の戦記にも見られるものであるが、敗戦直後から書き残されてきた多くの戦記にも存在する。高崎隆治はその数を「予想外に少ない」と『100冊が語る「慰安所」男のホンネ』の前書きに記しているが、それでも高崎が読んだ1000冊を越える戦記の中でも100点ほどを確認している<sup>6)</sup>。

このように考えると、慰安所は特殊のものではなく、このために多くの女性はその場に存在していることは予想に難くない。そして、少なからぬ記述を読み取っていくと、慰安所に通う戦記の著者である青年期を生きる戦地の兵士の姿が浮かび上がってくる。

戦記は、復員して戦後社会を生きる著者の振り返りの場でもある。青年期の自身の姿、拘束された場所でセックスワーカーとなった女性をどうとらえているか、戦記を著す営みは、著者たちの戦争観のみならず女性観までを照射するものと考えることができる。その中から戦後の日本人男性の女性に対する意識にもつながる視点を抽出し、現代社会の抱える課題につながるることができるならば、それが本稿の到達点となるものと考えられる。

## 2. 70年代の戦記と慰安所

大正9年（1920年）に生まれた春風亭柳昇は、昭和16年（1941年）2月に歩兵101連隊に招集される。昭和20年（1945年）船舶工兵として乗船した船の海没のために負傷し、同年の年末に戦傷病者として復員する。昭和44年（1969年）『与太郎戦記』としてこの間の手記が刊行されている。慰安所について次のように述べている<sup>7)</sup>。

当時、治安状況の悪くないところでは、

日本軍の駐屯地には、かならず、慰安所……陸軍専用のお女郎部屋があった。女性は、現地徴用の人が多かった。

（春風亭柳昇 2005：153）

慰安所を定義する言葉としてきわめて直截である。「陸軍専用」で（軍が組織的に行った）「現地徴用」の（本人の意に沿わないかたちで集めた）女性が「お女郎」になっていたこと（公娼制度のもとでセックスワーカーとなっていたこと）を柳昇は指摘している。『与太郎戦記』は、この続きに慰安所に“登楼”した様子が細かく描かれている。そして柳昇は「次の日曜日も、花子さんの部屋を訪問」<sup>8)</sup>し、

「<sup>シーサン</sup>先生、<sup>ライ</sup>来、<sup>ライ</sup>来……」大女に手をひっぱられると、フシギや私の胸は、早鐘のように鳴りわたりだした。部屋に入ると大女はすぐに中国服をぬぎにかかった。

（春風亭柳昇 2005：155）

と記している。

柳昇の駐屯した安徽省巢湖の慰安所について、『女たちの戦争と平和資料館』はホームページに「日本軍慰安所マップ」を立ち上げている。本稿でも事実や内容の確認のためにデータを引用する<sup>9)</sup>。

巢縣の特種慰安婦検診ノ状況

昭和18年2月 平均一日現在人員：34

検査延人数：内地人0, 半島人11,

中国人91, 計102

第15師団軍医部 衛生業務要報

（「師団衛生業務要報綴」）

第15師団は柳昇の所属した101連隊（第61師団）の前任の部隊である。柳昇が着任する直前に100人を超える女性が軍医による検診を受け、その中の9割が中国人女性であることを読み取

ることができる。「日本軍慰安所マップ」では同じく15師団所属の67連隊の鈴木啓久が中国人、朝鮮人20名を誘拐して慰安婦としたことを昭和29年（1954年）に法廷で証言し、調書が残されている<sup>10)</sup>。徴用という名の誘拐によって“花子さん”が慰安所にやってきた可能性は高いものと考えられる。

慰安所の設置は昭和7年（1932年）、第一次上海事変の際に始まったことを吉見義明は次のように指摘している<sup>11)</sup>。「上海事変勃発と共に我が軍隊の当駐屯増員に依り、此等兵士の慰安機関の一助として海軍慰安所（事実上の貸席）を設置し、現在に至りたり」とある。

その後陸軍も「兵が女捜しに方々をうろつき、いかがわしき話を聞くこと多し。」<sup>12)</sup>という状況から上海派遣軍参謀からの指示のもと慰安所が設置される。軍が管理する慰安所は強姦事件対策のためだけでなく、性病の蔓延防止の役割も担っていることを吉見は指摘している<sup>13)</sup>。

慰安所は昭和12年（1937年）以後、中国政府と全面的な戦争に突入するとその数を急速に増やしていく<sup>14)</sup>。そして、戦線が東南アジアや南方に広がると（太平洋戦争）、慰安所もそれに伴い各所に開設されていく。2019年12月、共同通信は『慰安婦「兵70人に1人」と記述 外務省文書、軍関与を補強』という記事を配信した。青島の総領事から外務大臣への報告書（昭和13年）に、不足する芸妓、酌婦（朝鮮からを含む）の渡航許可を依頼するものである。その際、陸軍は「兵員70人に対して1名くらいの酌婦」<sup>15)</sup>を基準にしていることも明らかにされている。

この数字を出征者数や戦死者数と比較すると、慰安婦と呼ばれた女性が1万、2万程度の人数では済まないことを意味しよう。内地の「事実上醜業を営み、満21歳以上、且花柳病其の他、伝染性疾患なき」<sup>16)</sup>女性だけでは不足し、年齢の満たない者を「黙認」する。植民地である朝鮮、台湾から集める、占領地での徴用とあらゆる方

法を用いて慰安所へ駆り立てていく。

敗戦の1年前、昭和19年（1944年）には、「総督府は『女子遊休労力』の積極的活用という名目で（中略）新規学校卒業者と満14歳以上の未婚者の全面的動員体制を確立しようとした。この結果、朝鮮では以下の結果となったことが朝鮮総督府から内務省に報告されている<sup>17)</sup>。

一般労務募集に対しても忌避逃走し、或は不正暴行の挙に出ずるもののあるのみならず、未婚女子の徴用は必至にして、中には此等を慰安婦となすが如き荒唐無稽な流言巷間に伝わり、此等悪質なる流言と相俟って、労務事情は今後益々困難に赴くものと予想せらる。

内務大臣請議「朝鮮総督府部内臨時職員設置制中改正の件1944年6月27日」  
(吉見B1995:101)

慰安婦の募集を含めて朝鮮総督府が徴用に関与していること、朝鮮の人々の間で「慰安婦」の存在が知られていることを読み取ることができる。

同書ではだまされた事例、身売りされた事例、暴力的に連行された事例を吉見は記している。木村幹は、「『戦記物』の随所に慰安婦が登場すること、「多くの『戦記物』において慰安婦に朝鮮半島出身者が多かった事や、また彼女らが慰安婦になるまでの過程が様々であった事が記されている」<sup>18)</sup>ことを指摘している。

### 3. 2000年代の戦記へ

#### 1. 戦記が語るもの

『与太郎戦記』の書かれた時期は、著者たちが社会生活の第一線で活躍していた時期である。高度経済成長のただ中である。戦死者の遺族も存命である。こうした中、高橋三郎は、「『戦記もの』にはいつの間にかあまりに悲惨なことあ

まりに忌まわしいことは書かないという一種のタブー」<sup>19)</sup>を指摘している。同書では、人肉食、傷病兵の“処置”，占領地の女性への集団暴行などもタブーとしており，時代が下るにつれ伝聞から目撃へと記述が変化していくことが記されている。その一方で自分が友軍の肉を食べたことや自分の手で“処置”をしたことは語られていないことも高橋は記している。慰安婦への記述はそのタブーに含まれていない<sup>20)</sup>。

国鉄からJRへと運転士として勤め上げた宇田賢吉は，人命に関わる事故について次のように述べている<sup>21)</sup>。

事故の記録を知りたい読者が多いのでは、という質問をしばしば受ける。(中略)

そういう声があることを知りながら、私は事故について述べたことはない。今後もないだろう。人命が失われるさまを目の当たりにすると、その状況は記憶から消えることはない。亡くなった方々には支えを失った家族が、多くの知り合いがいることだろう。もし私が書けば、いつかその人たちの目に触れるに違いない。自分がその立場になったらと考えれば、とても筆を持つ気にはなれない。(宇田2008:253)

戦記ものは、執筆者の体験を語るだけではなく、「肉親の消息を尋ねるかたちの読まれ方も」あり、「あまりに悲惨なことや忌まわしいことは、自分たちの胸におさめて」<sup>22)</sup>おく内容が定着していくようになる。上述の鉄道の運転士の事故に対する気持ちと同じように当事者の語りから戦場の生々しい部分はこうして切り取られていく。慰安所の記述は“生々しくない”記録であったと言える。

この戦争に対して柳昇は同書のまえがきに次の文章を残して評価している<sup>23)</sup>。

戦争責任、そんなことは私にはわかりま

せん。兵隊は日本でも、アメリカ、ソ連でも、みんな命令により戦場に送られ、「お国のために」と思って戦い、死んでゆきました。兵隊さんには罪はないのです。

(春風亭柳昇 2005:4)

兵士は戦争の被害者である。同じく慰安婦も戦争の被害者として位置づけたからこそ、戦場の生々しさと一步離れた慰安所を描くことにはめらいはないものと考えられる。

『与太郎戦記』の刊行から10年ほど過ぎた1986年(昭和61年)、第一次学徒出陣者の一人戸井昌造<sup>B)</sup>は『戦争案内—ぼくは二十歳だった—』を刊行する。「おわりに」の中で、戸井は次のように述べている<sup>24)</sup>。

わたしは自分の歳を言うとき、戸籍上の年齢から三つ引くことにしている。三年間はロスタイムだったからだ。しかも20歳から23歳までの華の三年間だ。

このうらみは書きとめておかねばならぬ。(戸井1999:310)

こうして戸井はメモをふくらませていく。戦後、画家として、民衆史の研究者として戸井は「わたしたち60歳以上の人間は、ツケを次代にまわすようなことだけはやっちゃいけないということ」、「反省の中に『戦争』をキチンと据え、あのとき自分はどう考え、なにをしたかを真正面に思い起こすべき」<sup>25)</sup>ことを読者に伝えている。この翌年に刊行した『沖繩絵本』でも「とても重苦しく、観光気分では行けるようなところではなかった」<sup>26)</sup>と書き残し、「琉球処分」以来の歴史や戦争の足跡、米軍基地の存在に正面から向かい合う文章を残している。

その戸井は慰安所の体験を次のように述べている<sup>27)</sup>。

その夜、ぼくはやっと童貞を失った。こ

とが終わったとたん、小さクーニャンはカメラにまたがってシャーとやった。客は日本人も中国人もごちゃまぜ。なんの雰囲気もない。四方ベニヤ板張りにベッド1つの殺伐とした部屋だった。その後、ぼくは積慶里へ通いだした。(戸井1999:197)

ではそうした文脈による慰安所への語りは2000年代の戦記の中ではどのようになっているのだろうか。

## 2. 2000年代の戦記から見えるもの

2004年、『従軍と戦中・戦後』を書き残した益田豊<sup>○</sup>(1917年生まれ、1937年入隊)は、慰安所について次のように書き残している<sup>28)</sup>。

この盛り場には中国人慰安所と朝鮮人慰安所があって、(中略、一目ぼれした朝鮮人慰安婦から)話してくれたところによると、親元に大金が要ることになって仕方なく大金を前借して身売りしたということであった。(益田2004:90)

同書は戦地での中国人の殺戮にも次のように言及している<sup>29)</sup>。

私は親しくなっていた近所の農民たちを逃がしてやろうと思い朝早く起きて近所に5, 6軒かたまっている農家に行ってみて、腰が抜けるほど驚いた。というのは、庭のあちこちに首を切られて殺されている農民の死体が17, 18体転がっていて、その中には女と子供の死体があったからであった。(益田2004:101)

益田は、「民衆を殺りくし婦女子を強姦し財物を略奪して、なにが聖戦であろうか。」<sup>30)</sup>と述べている。益田の文章から“自省の念”を読み取ることができる。そうした文脈の中で、朝鮮

人慰安婦の前借を自らの体験の中で聞き書きしている。筆者と女性との会話も推察される。

中国戦線から「身体が回復しないで亡くなった人が6千人もいたということである。したがって、身体が回復してもとのようになった者はガダルカナル島撤退者の半数にも満たない5千人だけということになる」<sup>31)</sup>というガダルカナル島に送られ生還した益田は、戦後様々な職業を経て建設会社の資材倉庫の所長となる。刊行されたとき、著者の年齢は80歳を超えている。体力的にも厳しさを増す中での執筆は、山岸治夫が『個人の生活史研究の意味』の中で指摘する「個人がその社会生活において、自ら、しないではいられない行為の目標、そうすることが直接自己の人生を生きることになる目標」<sup>32)</sup>となる、史料としての戦記の存在感が浮上する。

木村幹は「90年代に入り慰安婦問題が日韓両国間の重大な外交問題になる」<sup>33)</sup>と戦記ものから慰安婦の記述が「姿を消す」ことを指摘している<sup>34)</sup>。しかし、篠原が修士論文執筆時に調査対象とした<sup>35)</sup>76冊の内の20冊以上に慰安婦、慰安所についての記述が見られる。慰安婦、慰安所の存在は従軍した将兵にとっては戦地の記憶の一つとして記録に残すべきものであったものと考えられる。

植民地であった朝鮮出身者との出会いの記述は多い。

『有為転変の生涯』を著した十河實<sup>D)</sup>は中国戦線の27師団よりビルマ戦線に転属している。ビルマの戦場について、「丈夫な体で帰国できた者は100人に一人とか」<sup>36)</sup>と述べている。「戦場では前進すればそこえ直ぐに「慰安所」が開設される。朝鮮と九州の女がおおいらしい。(中略)南京で気が向いて友達の伊東と出かけた。朝鮮の女である少し話がわかるので楽しかった。」<sup>37)</sup>と述べている。益田や十河の文章に見

られる慰安所は、戦場の過酷さと比べて際立つものがある。

『復員船が来た 我が中国・ニューギニア戦記』を著した鈴木正七<sup>E)</sup>は、「異性も知らずに死ぬのは悔しいことだと口には出さなくとも誰もが思っていたことだろう。」<sup>38)</sup>と当時の戦友を慮る言葉を残す一方で、「花嫁支度をする金を貯めるために『慰安婦』になった者も多いと聞いている。しかし真実のところは知る由もないがそれだけ当時の朝鮮の生活は苦しかったものと推察される。」<sup>39)</sup>と慰安婦となった背景に対しても同様に慮る記述を残している。鈴木の子供が生まれた山形県は、昭和恐慌の影響を大きく受けた地域である。同県の伊佐沢村が娘の身売りの相談所を設けた写真が広く知られている。自身も小学校卒業後、満州の開拓団員に応募している。

ガダルカナル島からビルマへと転戦した阿部彰<sup>F)</sup>は、『一坪の戦場 綜集編』の中に慰安所の描写を詳細に描き残している。「『監督の説明では、もし万一ここで戦死するようなことがあれば、身分を一階級進めて篤志看護婦として広報され、靖国神社に祭ってもらえるとのことです』<sup>40)</sup>という女性の言葉とともに、「ほとんどが元山付近の北朝鮮出身者が多いのだが、はじめは女子勤労挺身隊として徴用され、横浜に着いたときに、内地の軍需工場に働くものと前線の慰安部隊との希望を聞かれ、気の強い仲間が仕事の内容は知らずにお茶汲み食事洗濯の手伝いくらいに考えて前線を希望したのだという<sup>41)</sup>という出自を書き残している。「篤志看護婦」、「女子勤労挺身隊」などの婉曲な表現に軍や朝鮮総督府が行った実態を垣間見ることができる。

毎日新聞社に勤務していた中島董英<sup>G)</sup>は、『私の戦記』書き残している。同書では応召した将校として慰安所設営に関わったり、女性の選定

に近隣の大都市徐州に出向いたりしている。1911年に生まれた中島は女兒2名を残しての応召であった<sup>42)</sup>。中島が開設に関わったと考えられる江蘇省新安の慰安所を利用した田辺利宏<sup>H)</sup>の手記『夜の春雷』を、石川逸子は次のように引用している<sup>43)</sup>。

新安というところ。ここでは住民はこれまでのところよりずっと「危惧をもった目」で、自分たちを見ていてさびしい、と田辺は書いている。到着の翌日、運河のほとりのトーチカで見張りをしている兵のところへ食事を運んだ田辺は、「慰安所」へ案内される。「小柄な半島人（朝鮮人の差別語：石川）の3、4名いる、日光館という慰安所が1軒ある。なれぬせいか、どこを見てもひしひしと寂しさが迫ってくる。

(石川2013:72)

北支派遣軍に招集された神出杉雄<sup>I)</sup>は中国各地を転戦していく。『大陸戦線こぼれ話 中島隊の軌跡』の中で日本軍の行為を次のように記述している<sup>44)</sup>。

敵性部落を攻撃すると：村人たちが右往左往していて、どれが村人でどれが八路軍の弁衣兵か見分けがつかない。(中略) 家宅搜索をすると小銃が出てきたりする。結局、そこにいた人たちを全て敵として扱わざるを得なくなる。(中略) 実は全員が村人であって、八路軍はとくに住民を残して次の部落に逃げ去った後だ。

(神出2003:76)

その一方で、神出は「慰安所ではないが、中国の都市に朝鮮から朝鮮人のブローカーにだまされてやってきた女性<sup>45)</sup>について記述している。神出としては、慰安所は駐屯する部隊が設営したものと認識していたと考えられる。同書では、

朝鮮出身の女性が拘束された環境下でセックスワーカーとなっていたことが記されている。

一つの戦記に登場する女性の数はごく限られた人数である。限られた体験の中に、親の借金のために前借した女性、お茶汲み食事洗濯の手伝いくらいに考えて女子挺身隊に徴用された女性など、さまざまな女性を取り巻く環境を読み取ることができる。

2000年代の戦記は、先に述べた川崎春彦のような思いを残して記述された傾向がある。慰安所についてもこれまで述べてきたように自身の買春の体験、ことに慰安婦とされた女性との対話をもとに書き残されているものも多い。アジア太平洋の各地での戦争体験には様々な差異はあるが、最前線はともかくとして戦場に植民地朝鮮を中心に、兵士を遊郭のように“慰安する”女性が大量に送り込まれた事実は否定できない。また、そうした女性が自分の意思以外の理由で戦場に存在したことをさまざまなかたちで確認することができる。

## 4 戦前と戦後をつなぐ遊郭

### 1. 軍が育てた遊郭

帝国陸海軍の兵営は20歳過ぎの男性の1000人単位での生活の場であった。軍備を拡大することは取りも直さず部隊の増設を意味し、全国各地に陸軍連隊が駐屯した。海軍も同様に、呉、横須賀など4つの鎮守府を拡充させてきた。

師団や連隊が増設されたとき、遊郭の新設や増設も進んだ。吉見義明は松下孝昭の研究をもとに次のように指摘している<sup>46)</sup>。

軍隊にとって遊郭の設置は、兵士の不満を解消することと、性病感染の防止に役立つと考えられており、歓迎すべきことであった。また、師団・連隊などのある地元にとっては、軍の要求に応えるという理由

のほか、遊郭設置による地元の繁栄という経済的理由があった。(吉見2019:49)

吉見は、日清、日露戦争後の明治29年(1896年)と39年(1906年)を比較して全国の娼妓の人数が39,068人から44,542人に増加したこと<sup>47)</sup>、昭和恐慌により経済状況が悪化した昭和5年(1930年)には全国で52,117人の娼妓を数えていること<sup>48)</sup>、などを同書で指摘している。

大正14年(1925年)2月、帝国議会議院で松山常次郎が提出した「公娼制度制限に関する法律案」<sup>49)</sup>は53票対157票で否決されている。娼妓の人権よりも経済を選んだ結果と考えられる。この時期、大阪では飛田に新たな遊郭が誕生した。飛田は「客は予約なしで、直接に登楼し、初見でも手軽に遊べた。」<sup>50)</sup>場所であった。性産業の間口が広がれば、その内容もより簡便なものになっていく。このスタイルは後に誕生する慰安所に通ずるものと考えられる。

吉見は、大正13年(1924年)の遊郭(貸座敷)利用者を成人男性の人口で割った結果を成人男性の貸座敷利用回数として算出している。年間1.5回という結果である。『日本帝国統計年鑑』には芸妓、酌婦の人数も収録されているので、これらの人たちと料亭などで行われる性行為もこの数値に加わることになると、当時の成人男子の買春行為はごく一般的のものであったと推察することができる<sup>51)</sup>。慰安所について議論する際、前提条件として当時の遊郭(性売買)について理解を深める必要がある。

### 2. 遊郭で働く女性

少なくとも戦前の遊郭等の性売買は一つの産業として存在した。が、そこに働く女性はどのようにやって来たのだろうか。井上理津子は、大正7年(1918年)大阪府駆込院院長の上村行彰が娼妓登録の際の健康診断で女性から聞き取った言葉をまとめた『売られ行く女』をもと

に次のようにまとめている<sup>52)</sup>。

両親のいる者が約54%，父または母のみの者が38%，両親ともにいない者が8%。「家長」の職業は、農業が最も多く28%，商業が21%，（中略）

本人の学歴は、無就学が27%，尋常小学校まで（1年間～5年間の就学のみを含む）が72%（井上2015：143）

上村は娼妓になる理由として以下の事例を含む40の事例を挙げている。

元酌婦。家の貧困を救うために。

父は漁師。10年前に出漁後、行方不明になった。長姉と三姉は嫁ぎ。次姉は娼妓。本人の学歴は尋常小学校2年まで。15で家出し、「素人奉公」を経て。19歳で酌婦になったが、酌婦とは名ばかりで、実際は「淫売」だった。6年後に帰郷すると、実家が零落し、貧困を極めていた。母に「親戚の2人も娼妓になった」と勧められ、「4年200円」で娼妓になった。（井上2015：144）

家庭の貧困による前借。娼妓となった理由はこの一言に尽きると言えよう。

前述した鈴木の「それだけ当時の朝鮮の生活は苦しかったものと推察される。」の一言は、家庭の貧困によりセックスワーカーを選択せざるを得ない女性の状況を、日常的なものとして承知している男性の姿をうかがうことができる。

前借にともなう拘束的な生活は、昭和6年（1931年）国際連盟の東洋女性児童取引実地調査団の調査対象となり、翌々年、公認妓楼の廃止の勧告を受けることとなる<sup>53)</sup>。

日本政府は、公娼制の廃止を準備中とするも、芸娼妓酌婦等周旋業を廃止する意思はなかった<sup>54)</sup>。

## 5. 戦後へ

### 1. 性産業の復興と男性のパースペクティブ

昭和20年（1945年）8月18日、「内務省警保局長橋本政美から、各庁・府県長官にあてに『進駐軍特殊慰安施設について』と題する秘密無電の準備指令が発せられている。』<sup>55)</sup>ことを『東京闇市興亡史』の中、「生贄にされた7万人の娘たち」を執筆した真壁晃は指摘している。戦後早々に立ち上がったRAA（特殊慰安施設協会）の一步である。その2日後には、新施設とともに現存の遊郭をそのまま利用すること、不足する女性を募集することなどが具体的に確認されている。真壁は、RAAの発足を「国家権力による“売春組織”の組織化」<sup>56)</sup>という評価を下している。

半年後、RAA慰安所は閉鎖に追い込まれる。塩見鮮一郎はこのときの協会の動向を五島勉の文章を引用して次のようにまとめている<sup>57)</sup>。

一方売春業者の方ではこの6ヶ月間に少なく見積もっても1億2千万円の利益を上げ、（中略）戦災で焼けた売春施設を復興し、保守政党へ献金し、官僚にも袖の下をばらまいた。（中略）業者が預金した7千万円ちかくの利潤を銀行はことごとく歓楽街の建設資金に投資し、各地の高級料理店・キャバレー街・赤線区域などは国民のどん底の生活をよそに急激に復興していった。

（塩見2015：98）

こうして性売買は“復興”していく。昭和32年（1957年）売春防止法が施行された後の39年（1964年）3月、東京オリンピック開催を前にして東京都トルコ浴場協会は名誉会長に自由民主党代議士大野伴陸を迎える<sup>58)</sup>。遊郭は解体したものの性産業は政府に支えられて存続している。供給のあるところには需要はある。男性の側か

ら見ると買春が日常的にある環境が形成されていく。

大野が協会名誉会長に就任した2年前の昭和37年(1962年)、イギリスタイムズ紙は「男子の平均賃金は35,000円、女子の平均賃金は16,000円。男性の平均を100としたとき、女性は45にすぎない」<sup>59)</sup>ことを指摘している。それは企業内で女性が「単純労働者として、低い賃金でクギづけしようとする考え方」のもとで「かわいい女」であることが、ますます露骨に要求されるようになってきた<sup>60)</sup>傾向が定着する。男性の持つ意識は女性の地位向上を阻害していくことになる。

タモツ・シブタニは、行動の一貫性を準拠枠形成する集団を通して次のように説明している<sup>61)</sup>。

ある人間の行動の一貫性は、その人の組織化されたパースペクティブの観点から説明され得る。いったん人間がその人の集団から特定の見地を取り入れると、それはその人の世界に対する適応方針となり、また、その人はこの準拠枠をあらゆる方向に向けてることになる。(シブタニ 1955=2013:7)

戦前から続く性産業、職場での男女格差などが積み重なり、女性に対する「特定の見地」が取り入れられ、女性に対する「いたわりや誠意のある姿勢」<sup>62)</sup>が後景に追いやられていくことになる。慰安婦問題の合意の難しさがここにある。そのためには、当り前のことではあるが事実をありのままに伝えることが大きな一歩となるものと考えられる。その意味で、2000年代に記された戦記の記述の持つ意味は大きいと考える。

## 2. なぜ性産業で働くのか

最後に性産業に従事する女性について言及するとともに、アジア・太平洋戦争中の慰安所に関わって現代につながる課題を提示し、本稿の

まとめとしたい。

青砥恭は『ドキュメント高校中退—いま貧困がうまれる場所—』の中で「高校を中退すると雇ってくれる仕事の数はぐーんと減った。ほとんどの100円ショップでバイトとして雇うのは高卒か現役の高校生だけだ。だから高校の中退者には工場くらいしか働く場所がなくなる。」<sup>63)</sup>という言葉聞き取っている。青砥は「生徒の学力の低さと中途退学は貧困が原因」<sup>64)</sup>であることを指摘している。性産業に従事する女性への聞き取りも行っている<sup>65)</sup>。

大阪の飛田の関係者から膨大な聞き取りを行った井上理津子は、飛田の女性が「『好きでこのしごとをやっている』は、あり得ない。男に騙され、捨てられ、お金のために飛田に来た。親きょうだいの貧困のために売られてきた公娼時代と、変わらないではないか。」<sup>66)</sup>と言い切っている。

アジア・太平洋戦争中、戦線の各地に設けられた慰安所には、とりわけ朝鮮半島出身者が多かった。戦記の記述からもその部分は否定できない。そして慰安所に入入りした戦記の著者たちは、女性の言葉に耳を傾け、内地と異なる生活の苦しさを感じるようになった。女性との会話のなかで、「篤志看護婦」などの名称で“志願”した先が慰安所であったと聞かされた者もいた。多くの女性がやむを得ない状態のなかで応募する状態から、広い意味での「強制性」を読み取ることができる。そこには帝国陸海軍の緻密な動員計画が存在することも歴史学研究的なかで明らかにされている。様々な強制によって慰安婦とされた人たちが戦地に送り込まれたことは消し去ることのできない事実と考える。

私たちの社会はそうした視点を共通のものとしているのだろうか。社会的な諸事象を理解する点で合意は形成されるのであろうか。

シブタニは、「人間が行っていることを理解するためには、我々はその人間の独自のパースペクティブを理解しなければならない。」<sup>67)</sup>と大衆社会を理解するための手立てを述べている。さらにシブタニは、『流言と社会』の中で合意の形成とコミュニケーションの有効性について次のように述べている<sup>68)</sup>。

コミュニケーションの有効性は、共同行為の参加者がどの程度他人の役割を取得できるかによって左右される。それゆえ、最終的に到達する合意の形成にはかなりばらつきがある。(シブタニ1966=1885:245)

社会の様々な分断の背景をシブタニは半世紀以上前に示唆している。それはまた他者に対する想像力という問題でもありとえられる。

ブルーマーの求める「『行為者の観点』(standpoint of the actor)からのアプローチ」<sup>69)</sup>と言い換えることも可能である。それは「“生の”行為者の主観を取り上げ、分析の対象とする」<sup>70)</sup>ものでもある。

この点についての研究者の姿勢として青砥の文章を確認しておきたい。

青砥は前掲書を上梓するにあたり、100人以上の若者に聞き取りを行っている<sup>71)</sup>。「教師や友人に支えられながら生きる若者たちの話を聞きながら、一緒に涙を流したことも一度や二度ではない。」と記している。その結果として、青砥は次のような結論を得る<sup>72)</sup>。

若者の貧困、社会的排除は、社会全体を衰退させる。そういう意味からも若者たちの貧困は社会最大の問題である。日本では同じ年に生まれた子どもたちの10%が毎年社会から捨てられているのは明らかに高校教育という制度が破綻したことを示している。(青砥2009:231)

高校を中退した若者の言葉に耳を傾けた青砥は、現在も若者の貧困への支援者として埼玉県で活躍している。

慰安所の実実は70数年前の実実である。様々な資料、証言と対話を続ける中で差別的な扱いを受ける人、貧困の中で暮らす人、マイノリティーとされる人たちの存在が浮かび上がってくる。そうした人々たちへの共感、あるいは想像力は、分断の著しい現代の社会を理解するために不可欠なものであると考える。

2000年代の戦記は戦場の実実をありのままに伝える傾向にあることが指摘されている。それゆえに、慰安所を取り巻く実像も実実をありのままに記述された結果、現在を生きる我々に社会を理解するための様々な指標を提供しているものと考えられることができる。

## 注

- 1) 篠原真史「21世紀の戦記から読み取るパースペクティブ」佛教大学社会学研究会2020年『佛大社会学』44号 p.1
- 2) 高橋三郎1988年『戦記ものを読む』(アカデミア出版会) p.11
- 3) 吉田裕『兵士たちの戦後史』(岩波書店)2011年p.272
- 4) 篠原前掲書 p.1
- 5) 川崎春彦 2001年『日中戦争一兵士の証言 生存率3/1000からの生還』(光人社) p.229
- 6) 高崎隆治編『100冊が語る「慰安所」男のホンネ』(梨の木舎) p.3
- 7) 春風亭柳昇 2005年『与太郎戦記』(ちくま文庫) p.153 (原著は1969年立風書房より刊行)
- 8) 春風亭柳昇前掲書p.155
- 9) 『従軍慰安婦資料集』吉見義明 (A), 1992.11.27, 大月書店, 273ページ / wam公文書サイト: K\_D\_009-2 / 『政府調査「従軍慰安婦」関係資料集成』3・5巻, 女性のためのアジア平和国民基金, [3] 1997.3.20 [5] 1998.7.20, 龍溪書舎, [3] 213 [5] 資料の概要紹介73ページ。https://wam-peace.org/ianjo/resource/a-1925/より

- 2020.4.25 取得
- 10) wam公文書サイト：『日本侵華戦犯筆供』第1冊, 2005.5, 中国档案出版社, 44ページ。  
<https://wam-peace.org/ianjo/resource/a-1924/>より2020.4.25 取得
- 11) 吉見義明 (B) 1995年『従軍慰安婦』(岩波新書) p.15 (原典は吉見前掲書A p.34)
- 12) 吉見前掲書B p.17 (原典は『岡部直三郎大将の日記』1932.3.14)
- 13) 吉見前掲書B p.18
- 14) 吉見前掲書B p.22~p.33
- 15) news.yahoo.co.jp 共同通信の記事2019.12.6  
[https://wam-peace.org/main/wp-content/uploads/2019/12/2017\\_nintei.pdf](https://wam-peace.org/main/wp-content/uploads/2019/12/2017_nintei.pdf)より取得 (2020年5月17日)
- 16) 吉見前掲書B p.88 (原典は吉見A p.5)
- 17) 吉見前掲書B p.101 (原典は『内務大臣請議』1944.6.27「朝鮮総督府部内臨時職員設置制中改正の件」)
- 18) 木村幹「日本における慰安婦認識：1970年代以前の状況を中心に」神戸大学国際協力研究科『国際協力論集』(25号1巻) 2017.7 p.26
- 19) 高橋前掲書p.58
- 20) 高橋前掲書p.105 ~ p.107
- 21) 宇田賢吉2008年『電車の運転—運転士が語る鉄道のしくみ—』(中公新書) p.259
- 22) 高橋前掲書 p.57
- 23) 春風亭柳昇前掲書 p.4
- 24) 戸井昌造1999年『戦争案内—はくは二十歳だった—』(平凡社) p.310 (原著は1986年晶文社)
- 25) 戸井前掲書 p.316
- 26) 戸井昌造2000年『沖縄絵本』(平凡社) p.245 (原著は1987年晶文社)
- 27) 戸井前掲書p.197
- 28) 益田豊 2004年『従軍と戦中・戦後』(文芸社) p.90
- 29) 益田前掲書 p.101
- 30) 益田前掲書 p.103
- 31) 益田前掲書 p.200
- 32) 山岸治男 1983年「個人の生活史研究の意味」大分大学教育学部紀要『教育科学』6-5 p.114
- 33) 木村前掲書 p.41
- 34) 木村前掲書 p.41
- 35) 篠原真史2016年『個人の体験はどのように歴史的体験に転化するか』(佛教大学提出)
- 36) 十河實2003年『有為転変の生涯』(新風舎) p.40
- 37) 十河前掲書p.34
- 38) 鈴木正七2005年『復員船が来た 我が中国・ニューギニア戦記』(文芸社) p.133
- 39) 鈴木前掲書p.134
- 40) 阿部彰晤2002年『一坪の戦場 綜集編』(私家) p.163
- 41) 阿部前掲書p.163
- 42) 中島董英2002年『私の戦記』(文芸社) p.184
- 43) 石川逸子『日本軍「慰安婦」にされた少女たち』2013年(岩波ジュニア新書) p.72  
wam日本軍慰安所マップ<https://wam-peace.org/ianjo/resource/a-1975/>より取得 (2020年11月21日)
- 44) 神出杉雄2003年『大陸戦線こぼれ話 中島隊の軌跡』(文芸社) p.76
- 45) 神出前掲書p.62
- 46) 吉見義明 (C) 2019年『買春する帝国』(岩波書店) p.49
- 47) 吉見前掲書C p.41
- 48) 吉見前掲書C p.99
- 49) 吉見前掲書C p.109
- 50) 井上理津子2015年『さいごの色町飛田』(初版は2011年筑摩書房) p.138
- 51) 吉見前掲書C p.100
- 52) 井上前掲書p.144
- 53) 吉見前掲書C p.148
- 54) 吉見前掲書C p.157
- 55) 猪野健治編1978年『東京闇市興亡史』「生贄にされた7万人の娘たち」真壁昊p.194同書は塩見鮮一郎2015年『戦後の貧民』(文春新書), 小関智弘2005年『東京大森海岸はくしの戦争』(筑摩書房)の引用元として紹介されている。
- 56) 真壁前掲書p.197
- 57) 塩見前掲書p.98  
原典は五島勉1953年『黒い春』
- 58) 貴志謙介2020年『1964東京ブラックホール』(NHK出版) p.151
- 59) 貴志前掲書p.174 原典は英タイムズ誌 1964.6.15
- 60) 貴志前掲書p.174原典は読売新聞1964.6.15
- 61) タモツ・シブタニA『パースペクティブとしての準拠集団』1955年 木原彩香他訳, 鹿兒島大学discussion papers in economics and sociology Vol.1301 紀要論文2013年4月刊 p.7
- 62) 熊谷奈緒子2014年『慰安婦問題』(ちくま新書) p.210 原典は李柱欽「韓米日会談, 関係改善の機会に」『朝日新聞』2014.3.22
- 63) 青砥恭2009年『ドキュメント高校中退—いま,

『貧困が生まれる場所』 p.90

- 64) 青砥前掲書p.234  
 65) 青砥前掲書p.122  
 66) 井上前掲書p.377  
 67) シブタニ前掲書(A) p.11  
 68) タモツ・シブタニB 1966年『流言と社会』  
 広井脩他訳1985年(東京創元社) p.245  
 69) 桑原司, 木原彩香2010年『ハーバード・ブ  
 ルーマーのシンボリック相互作用論の展開の可  
 能性』鹿兒島大学『地域政策科学研究』第7号  
 2010.3 p.247  
 70) 中野正大・宝月誠編『シカゴ学派の社会学』  
 2003年(世界思想社)「ブルーマー『シンボリッ  
 ク相互作用論』」桑原司 p.289  
 71) 青砥前掲書 p.227  
 72) 青砥前掲書 p.231
- A) 川崎春彦(1922年鹿兒島県生まれ)旧制中学  
 卒業後,上京,大手軽金属工場勤務しながら大  
 学工学部夜間部に在籍し1943年応召。戦後は銀  
 行勤務から会社経営。1000人の同年兵のうち帰  
 還者は3名であることが記されている。
- B) 戸井昌造(1923年兵庫県生まれ)早稲田大学  
 在学中陸軍少尉として学徒出陣する。戦後は劇  
 団ブークの活動を経て画家,民衆史の研究者と  
 なる。秩父事件の研究では第一人者とされてい  
 る。(この項はウィキペディアを参照している。)  
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%88%B>

8%E4%BA%95%E6%98%8C%E9%80%A0  
 (2020.12.25取得)

- C) 益田豊(1917年広島県生まれ)引船汽船機関  
 士在職中の1938年応召。
- D) 十河實(1907年香川県生まれ)商業学校を卒  
 業し,銀行に勤務する。現役時代士官学校に入  
 校し,1941年中尉として応召。
- E) 鈴木正七(1918年山形県生まれ)農業補習学  
 校卒業後満州開拓団へ。1939年歩兵32連隊に  
 応召。予備士官学校入校後,歩兵224連隊に転  
 属しニューギニア戦線へ。復員後は県庁職員と  
 なる。
- F) 阿部彰晤(1922年宮城県生まれ)1941年志願  
 して歩兵4連隊に配属され,終戦まで在籍。
- G) 中島董英(1911年富山県生まれ)大学を卒業  
 し毎日新聞社に就職。1938年歩兵83連隊に応召。  
 一度退役し,44年再度招集を受ける。復員後も  
 同社に勤務。
- H) 田辺利宏(1915年岡山県生まれ)日大卒業後  
 郷里の女学校に就職。在職中の1940年応召。翌  
 41年戦死。
- I) 神出杉雄(1919年北海道生まれ)1941年,北  
 支派遣軍応召時には既婚であった。

(しのはら まさし

甲府市立南中学校教諭)